令和６年度学校評価報告書　最終評価　【国立市立国立第七小学校】

学校教育目標	担当校務分掌	年間経営目標	具体的な方策	評価指標	達成状況 中間評価	達成状況 最終評価	中間報告 成果と課題	最終報告 成果と課題	学校関係者評価
かしこく	校内研究	①児童一人一人が意欲的に授業に取り組む。	・教師は主に問題解決型学習の授業で児童の実態に合った導入の工夫や学習課題の設定、発問の工夫・精選等を行う。	A　学校生活アンケートで、自らすすんで学習に取り組んだと答えた児童が90％以上 B　学校生活アンケートで、自らすすんで学習に取り組んだと答えた児童が80％以上90％未満 C　学校生活アンケートで、自らすすんで学習に取り組んだと答えた児童が80％未満	A	A	教員同士が学年会等で教材研究や児童理解の機会をもち、児童の実態に合う学習課題や発問の工夫を行い、日々授業改善に努めている。教師が授業改善を重ねることで、児童が「やってみよう」「解いてみたい」などの気持ちが高まり、学習意欲の向上に繋がっている。	教員同士が、学年会などで教材や児童の様子について情報を共有し、児童理解に努めた。年間を通して継続的に授業改善を行い、どの教科や単元でも教師が発問の工夫をすることで、児童が主体的に取り組める授業を行うことができた。	教員同士が授業を互いに見合い、高め合って進めていく取組がよかった。授業においては、児童の生活経験に近い内容を設定したり、具体的な例を用いたりして指導することで、児童が主体的に学ぶように工夫されていることも分かった。教職員同士が尊敬し合い、より指導力の向上へつなげていけるようにしてほしい。児童が、互いの思いを受け止めることを大切にしているが、いつか自分とは異なった考え方に出合うこともある。その際に、児童がどのように受け止めて自己表現をしていくのかが課題になると思う。
	校内研究	②道徳の授業を通して、児童一人一人が課題を自分ごととして捉え思考する。	・児童の思考を揺さぶる発問を工夫する。 ・児童同士が交流できる授業を実践する。	A　学校生活アンケートでいろいろな考えに気付くことができたと答えた児童が90％以上 B　学校生活アンケートでいろいろな考えに気付くことができたと答えた児童が80％以上90％未満 C　学校生活アンケートでいろいろな考えに気付くことができたと答えた児童が80％未満	A	A	教員が校内研究を中心とした道徳の授業改善を重ねることで、道徳の本質に迫る授業ができるようになっている。授業では、ペアやトリオ、たずね歩きなどを行っている。児童が自分と同じ考えを見付けたり、違う考えを聞いたりすることで道徳的価値を多角的・多面的にとらえる機会を増やしている。	学級で意見を否定しない雰囲気を大切にするなど、児童が安心して話ができる学級作りに努めた。今後も授業内での交流の手だてを充実させたり、様々な教科で揺さぶる発問をしたりできるように努めていく。	
	校内研究	③教員同士が互いの授業を見合い授業改善を図る。	・教師は、普段の授業や授業観察等の機会を活かし、授業を見合うことで互いの指導技術や指導方法の共有を図る。 ・授業参観後はポジティブなフィードバックをする。互いに感想交流することで児童にとってより分かりやすい授業展開を行う視点を養っていく。	A　他の教員の授業を年に3回以上見て授業改善を図った教員が90％以上 B　他の教員の授業を年に3回以上見て授業改善を図った教員が80％以上90％未満 C　他の教員の授業を年に3回以上見て授業改善を図った教員が80％未満		B		肯定的な回答が約86％であった。評価としてはBだが、今年度道徳の授業を中心に職員室の至る所で教科の話題やフィードバックを行う教員の姿が見られた。学級等の実態により、授業を参観するために、45分間教室から離れることが難しいという意見もあった。短い時間でも参観できるように校内で工夫していく。	
やさしく	生活指導	④仲間外れや相手の嫌がる言葉遣いをしない児童を育成し、いじめを見逃さない。	・全教職員が児童の小さな変化を見逃さないようにし、いじめの未然防止に努める。 ・児童同士のトラブルは即時解決を図り、相手が嫌な思いをしていると分かった時には、「ごめんね。」など、謝ることができる児童を育てる。 ・生活指導夕会やいじめ・不登校委員会など、教職員間で児童の様子を週1回は共有し、早期発見及び早期対応の徹底を図る。	A　児童の様子を、学年や学校全体で共有することに努めた教員が90％以上 B　児童の様子を、学年や学校全体で共有することに努めた教員が80％以上90％未満 C　児童の様子を、学年や学校全体で共有することに努めた教員が80％未満	A	A	100％の教員が、「だいたいできた」「できた」と答えている。情報を共有して児童を見取り、チームで対応する大切さを教員が十分に理解していることが分かる。より多くの大人の目で児童を見守り、早期発見・早期対応の徹底を続けることと、いじめの未然防止にも引き続き努めていく。	100％の教員が、「だいたいできた」「できた」と答えている。情報を共有し早期に組織的な対応をしたことで、関係機関と連携することができた。引き続き、より多くの大人の目で児童を見守り、いじめの未然防止に努めていく。	避難所運営委員会の取組を地域と学校が共通理解し、児童は身の安全の守り方を学んでほしい。そのためには、学校と地域の連携だけでなく、地域が子どもたちを守るという役割がどういうことなのかを明確にしていく必要もある。中学校へ進学した時に不登校になる児童がいるので、自分に自信をもって進学していけるといい。優しさも大切だが、学習面や行事などで、自分なりのヘルプの出し方を身に付け、自分の思いを伝える力を育てていくことも大切になってくるのではないだろうかと感じる。
	生活指導	⑤すすんで挨拶をする児童を育成する。	・月目標のめあてや振り返りの指導を通して、挨拶の大切さや必要性について月に2回以上は指導し、児童自らが気付けるようにする。 ・校内で児童とすれ違う場面では、教職員が率先して挨拶を行い、模範的な姿を見せる。	A　自分から挨拶をすることができた児童が90％以上 B　自分から挨拶をすることができた児童が80％以上90％未満 C　自分から挨拶をすることができた児童が80％未満	A	A	挨拶における具体的な方策を、多くの教員が実践している。高学年では、挨拶できる児童が多く見られるようになった。地域や教職員から見て、児童が自分から挨拶をするという姿が明確であり続けられるように、今後も繰り返し指導・支援していく。	最終評価では、「自分から挨拶ができた」と回答した児童が、ほとんどの学年で増えた。月目標のめあてや振り返りを活用した指導をしたり、教職員が率先して模範的な姿を見せ続けたりして、引き続きすすんで挨拶をする児童の育成に取り組んでいく。	
	生活指導	⑥自分を大切にし、自分に自信をもてる児童を育成する。	・年2回、学校生活満足度調査を実施し、調査結果に基づき、よりよい人間関係が築けるよう指導をする。 ・担任による年2回以上の全員面接において、児童の長所を一人一人伝え、児童の自己肯定感を高める。	A　グループエンカウンターを学期に1回以上行った教員が90％以上 B　グループエンカウンターを学期に1回以上行った教員が80％以上90％未満 C　グループエンカウンターを学期に1回以上行った教員が80％未満	B	A	学校生活満足調査の結果を共有し、講師を招聘しグループエンカウンターの研修を行った。具体的なエンカウンターの方法を知り、88％の教員が1回以上行っている。効果的なグループエンカウンターを実践できるように、2回目の学校生活満足調査の結果を分析し、研修を重ねていく。	2回目の学校生活度満足調査の結果を分析し、講師を招聘し研修を行った。研修にて学級担任は、効果的なエンカウンター等の計画を考え、94％の教員が1回以上行うことができた。100％を目指し、校内の研修等を充実させていく。	
げんきよく	体育	⑦体を動かす楽しさや心地よさを味わわせ、基礎的な体力向上に努める児童を育成する。	・元気アップタイムや短縄月間の取組を充実させ、運動や外遊びを推奨する。 ・東京都の体力テスト結果を分析し、体育の授業において、苦手な種目を克服できるような運動を常に準備運動などに取り入れる。	A　休み時間や体育の時間にすすんで体を動かしていると答えた児童が90％以上 B　休み時間や体育の時間にすすんで体を動かしていると答えた児童が80％以上90％未満 C　休み時間や体育の時間にすすんで体を動かしていると答えた児童が80％未満	C	B	運動会では、委員会で七小体操をつくり、全校共通の準備運動に取り組むことができた。今年度の体力テストの結果を共有し、結果を分析して児童の傾向を把握していく。苦手なところは体育等で常時活動に取り入れていく。暑さで校庭で遊べない日が続いたので、体育館を活用するなど体を動かす機会をつくる。	縄跳び週間や元気アップタイムの活動を通して目標に向かって運動に取り組もうとする児童が増え、80％以上の児童がすすんで体を動かすことができたと回答した。一方、教員の35％が常時運動を意識して行うことができなかったと回答していた。そこで、体力テストの結果から苦手な分野を学年ごとに常時運動として取り入れるように提案し、年間指導計画の中に入れていく。	教師の意図的な活動の設定や、児童が自分で選べる場面を設定したら、楽しいと感じる児童も増えるのではないか。姿勢保持の力が弱いことが気になった。
	特別支援	⑧一人一人の個性や特性を互いに受け入れ、成長できるように家庭や関係機関との連携を密にする。	・ヘルプスキルを高められるような指導を繰り返し行い、児童自身が、心を安定させて過ごすための手段や方法を身に付けられるようにする。 ・校内支援委員会を定期的に開催し、支援が必要な児童や家庭へ支援が届くように関係機関との連携を図り、組織的に対応する。	A　組織的な支援方法を学び、個に合った指導や支援を実践した教員が90％以上 B　組織的な支援方法を学び、個に合った指導や支援を実践した教員が80％以上90％未満 C　組織的な支援方法を学び、個に合った指導や支援を実践した教員が80％未満	A	A	学期毎に特別支援の校内向け研修会を行い合理的配慮の必要性や支援方法を等を教員が学んだことで、支援の必要性を理解し90％以上の実践に繋がった。より特別支援教育の充実を図れるように、具体的な配慮の仕方や支援実践方法について理解啓発できるよう研修会等を実施していく。	特別支援教育に関わる教員と、通常の学級の教員が常日頃から指導や支援の実践について話をすることができている。こうした常日頃からの連携により、個に合った指導や支援を実践できたと答えた教員が90％以上となる成果に繋がった。今後も、特別支援教育の視点が、日常の教育活動で当たり前となるように研修会等を充実させていく。	教職員が児童の実態に合わせた指導をしていこうと意識していることが分かる。どのようにヘルプを出すかを身に付けていくことは大切な力である。
	特別活動	⑨意欲的に学校生活を楽しく過ごすことができる児童を育成する。	・学級活動や学校行事を通して、全教員で児童の「居場所づくり」「絆つくり」に意識的に取り組む。	A　学校で友達と過ごす時間や先生と話す時間を楽しいと感じる児童が90％以上 B　学校で友達と過ごす時間や先生と話す時間を楽しいと感じる児童が80％以上90％未満 C　学校で友達と過ごす時間や先生と話す時間を楽しいと感じる児童が80％未満	A	A	担任が児童の「居場所づくり」「絆づくり」を意識して学級経営をしたり、児童集会や縦割り班活動で異学年との交流をしたりすることで、学校全体の98％以上の児童が学校生活の中で楽しさを感じられている。一方、全校で9人の児童が「楽しくない」12人の児童が「あまり楽しくない」と答えているので、特別支援を含め、個別に楽しさを実感できる支援をしていく。	委員会活動やクラブ活動において、教師主導ではなく、児童が中心となる主体的な取組にすることで、より活動を充実させることができた。また、5，6年生はほぼ全員が自分の役割を意識できるようになり、学校生活の中で楽しさを感じている。特別活動部として、簡単な構成的グループエンカウンターや学級開きの例を紹介していく。	心の粘り強さを育てていくことは、中学校での健全な生活や育成に繋がっていく。主体的な活動を通して、自分の考えを出す機会としてぜひ取り組んでほしい。